

仏典を読む (十二)

福祉社会と宗教

森田久男

伊勢内宮のはとり神路山に連なる小高い丘の上に、わが家の祖先代々の墓地がある。このあたりに寺は一つもなく、住民は神道に属していて、墓はすべて俗名である。いわゆる教派神道ではないから、宗教というより祭祀の習俗に近い。

京都では、幼いころ旧メソジスト系（現日本基督教団）の教会の日曜学校に通い、成人してからも洗礼を受けるには至っていないが、学生時代にはしばしばその教会を訪れた。少年・青年期に学んだ聖書のことばを、もし知ることがなかったならば、人生に対する考え方も、自然の見方も、いまの自分とは相当違ったものになっていただであらう。

ようやく仏縁を得たのは、家内の宗派が浄土宗であったことからである。佛教大学にお世話になってからは、仏教に關して見聞する機会が多くなり、このたび「仏典を読む」シリーズに執筆を求められたのも仏縁の一つであらう。仏典については今日まで全く不勉強であるが、遅ればせながら般若心経・金剛般若経、浄土三部経などをひもといてみた。正直なところはなはだ難解である。収獲の一つは、名作『銀の匙（さじ）』とともに学生時代愛読した中勘助の『提婆達多』の原典が、浄土三部経の一つ観無量寿経にあることを知ったことである。ともかく一知半解の知識で宗教や経典を語ることが間違いのものである。本欄の趣旨にはそぐわないかも知れないが、平素自分なりに福祉と宗教のかかわりについて考えていることを記して責を果したい。

今日目的概念としての社会福祉は、個人の尊厳を権利として実現することであり、そこに慈善・慈恵といった施す側の満足や、上からの恩恵の思想を持た込むことは峻拒さるべきである、とされている。しかし一方で、社会福祉が利他・愛他
の思想と実践を離れてはあり得ないことも論を俟たないであらう。

手もとの仏教語辞典によれば、大乘仏教の実践倫理（六波羅蜜）の第一に挙げられる「布施」とは、元来の①僧に施し与える金銭または物品、という意味から、②物的な寄捨の精神性が強調された結果、自己犠牲の精神が謳歌され、大乘仏教の宗教倫理の中核である利他行の最高とされた、と説明されている。（岩本裕著『日常仏教語』中央公論社）これを手

がかりに、金剛般若經の中で布施について説かれている個所を読んでみよう。（引用は中村元・紀野一義訳註『般若心經・金剛般若經』岩波書店）

「求道者はものにとらわれて施しをしてはならない。―菩薩於法應無所住行於布施」―「求道者・すぐれた人々は、跡をのこしたいという思いにとらわれないようにして施しをしななければならぬ。―菩薩應如是布施不住於相」そして後者の註に「具体的には私が・誰に・何をしてやった、という三つの念を離れて施与せよ、ということを教えているのである。これを仏教では『三輪空寂』とか『三輪清淨』という。『三輪』とは『施者』『受者』『施物』をいう。」と解説されている。

聖書でこれに相応するのは、イエスの山上の垂訓の一節であらう。わたしが親しんできたのは戦前の文語訳のもので、その簡潔で力強い文体と比較すると、今日の口語訳はいかにも間伸びしているように感ぜられる。以下引用はすべて文語訳による。

「汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。さらば施濟（ほどこし）をなすとき、偽善者が人に崇められんとて会堂や街にて為すごとく、己が前にラッパを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既に報を得たり、汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。是はその施濟の隠れん為なり。然らば隠れたるに見たまふ汝の父は報ひ給はん。」

（マタイ伝六・一―四）

仏典は善行が善行として意識されたときは、それはすでに完全な善行ではない、と説き、聖書は財宝に善行を地に積まず天に積み、と教えているが、両者はお互いに相通するものがあると思う。

しかし現実の社会は、そのような全き善行によって満されているのではなく、もろもろの利害錯綜のうちにすべての人は生活を営んでいるのである。今日の市民社会は、個人の尊厳を窮極の価値とし、その実現を防げている社会的障害の除去、いわゆる福祉需要（ニーズ）の充足、をもって社会福祉の役目としている。むろんニーズには物心両面があり、「人の生くるはパンのみに由るにあらず。」（マタイ伝四・四）であるが、社会福祉の役割りは、まず第一にパンがどれだけ公正に分配されるか、にかかっているといえよう。社会福祉はこころの問題である、というような表現は、パンをできるだけ多くかすめ取ろうとする側の詐計か、現実の社会の矛盾に目を蔽わせ、来世での救済を約束する欺瞞である場合が多いであらう。

しかしそれにも拘らず、社会の成員の一人ひとりが、創造者によって、絶対者によって、あるいはすべての他者によって生かされている、という感謝のこころを持たない社会は、それこそヘーゲルのいう「欲望（欲求）の体系」以上のものにはなり得ないであらう。市民社会をして福祉社会たらしめるには、社会福祉の中に説教を持ちこむのではなく、宗教がその独自の役割りを果たすことが必要ではないかと思う。

（もりた ひさお 社会学部教授）